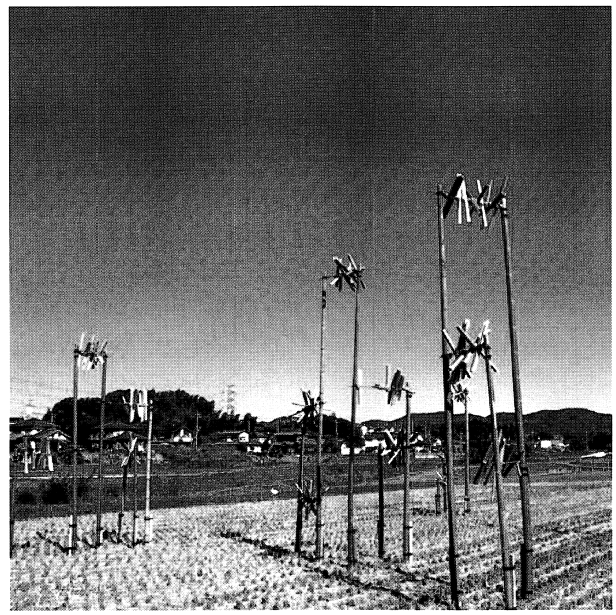
バンブーインスタレーションの展開Ⅱ

The Development of the Bamboo Installations Ⅱ

西尾　貞臣
Sadaomi Nishio



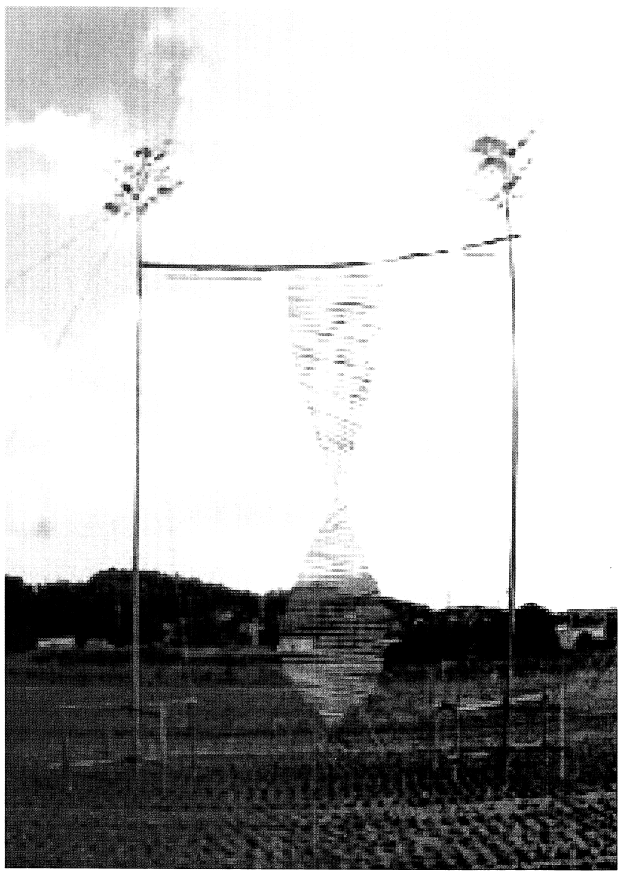
2005　筍賞「風の色」名古屋造形芸術大学・短期大学部・女々

はじめに

1994年（平成６年）に、地域や本大学の若い有志が集い開催した「おおくさ博覧会」の催しの一つとして、地域の里山に勢力を伸ばす竹林の竹を、素材として活用するアイデアから生まれた「竹の野外造形展」（８作品）を、翌年も開催することとなり、名称も改め「バンブーインスタレーション」として開催し、以降回を重ねて、2005年（平成17年）には第12回となりました。

先の1997年（平成９年）には、本大学の紀要に、「バンブーインスタレーションの展開」と題し、論文を掲載させていただきました。

この度、「バンブ－インスタレーション」の12年間の内容の変化や充実、改良や改善、また関連の広がり等、その後をまとめ記録する報告の場を再び与えていただき、深く感謝申し上げますとともに、慎んで報告いたします。



2004　八田川賞「風を感じて」大草25会

1　背景とその後の経過

この活動を始める以前、1980年代頃の、この地の風景を撮った写真を見ますと、春の風景には、たわわに実るきつね色の麦の波が広がり、麦秋の風景が確認出来、時の経過の中での、記憶の不確かさに気づかされます。

何年かを経るなかで、米と麦の二毛作が米のみの単作となり、近年まだ散見されるに留まってはいますが、休耕田・耕作放棄地が出現して来ています。

また、耕作する人の高齢化も深刻で、後継者の多くは、栽培に意欲なくJAに依託し、何とか水田風景が保たれ、秋には黄金色の穂波が、この地の風景となっています。

何時、この危うさが表に現れて来ても不思議ではない状況にあります。

一方、里山の状況は、認識が甘く規制も緩い頃に蔓延し、今日も厳然と存在する産業廃棄物の埋立地があり、現在も数カ所稼動しており、この地の環境は、横ばいの状態であり、改善には程遠い状況にあります。

そして、雑木林や竹林の状況は、地域の有志の働きかけはあるものの、多勢に無勢の観があり、相変わらず、荒れた状況に留まっています。

幸い、後述しますが、幾つかの有志の団体が竹林整備の活動をはじめており、これらを先鞭により広い参加につながり、整備が推進される希望は出て来ています。

a　「おおくさ」地域の変容（再確認のため再掲載）

この「おおくさ」地域は、以下の様々な要因により、大きな変容を遂げて来ました。

すなわち中央自動車道の開通、本短期大学・名古屋造形芸術短期大学の、この地への移転。

そして、桃花台ニュータウンの開発、これに伴う新しい住人の急激な増加、等々。

特に、桃花台ニュータウンの開発は、ここの風景を大きく変えて来ています。

都市近郊の住宅団地開発の典型がここにあります。

時間の経過は、この桃花台ニュータウンを徐々に、落ち着いた住生活の場に変えて来ていますが、地域全体の状況としては、一方では、周辺の従来の環境の中での田舎的生活が営まれ、他方で、新しく開発された住宅団地の中での都市的生活が営まれて、両者は個々のつながりからの交流や共同意識を持つものの、総体

としては、それぞれが個別に背中合わせの生活を営んでいる状況です。

この状況を乗り越え、如何に、この地域を共通の生活の舞台であると捉え、この地域への愛着を育んでいくことが出来るかが、大きな重たい課題として厳然とあります。

人々の出会い・交流が如何に広がり深まっていくか。

この「おおくさ」地域は、人的にも場的にも、実に豊かな地域であると認識します。

自然と人工、歴史・文化、人の多様性、粗と密、都市と農村、生産と消費、起伏、産業、などなど。

これらは、豊かさの基本である多様性、重層性を保証しています。

ここに於いて、本大学の存在は特に重要です。

今後、この地域は、どのような環境になっていくのであろうか。

それぞれが自立しつつ､全体の調和の中にある様な、より良い全体性を、持つに到るであろうか。

b　その後の経過

先の紀要は、バンブーインスタレーションを開催して、３年目にまとめたものでした。

今回は、その後８年経過し、様々な紆余曲折がありました。

これらを、以下に順次書き止めます。

ア　竹林～メイン素材

竹林は、大草地区の集落背後に広がる里山に分布していますが、かつては雑木林や果樹園であった所に、生命力の強い竹が侵食し、勢力を伸ばし、竹林の風景となっていますが、中に入ると、人が去り、放置され、雑然とした荒れた状態になっています。

毎回毎年、場所を変え切出しを実施する中から、竹林の所有者をはじめ、地区の人々、バンブーインスタレーションを知る人々の理解を得て、切出しの後始末の不手際などのお叱りをいただきながら、うちの竹も切って欲しいとの依頼を受けるようになり、ここ数年は、桃花台と大草の境に広がる「お城山」の竹林の切出し整備を実施し、人通りのある場所でもあり、目に見えての整備、竹林の変化に、関心も高まって来ていると受止めています。

イ　田圃～設置場所

バンブーインスタレーションの眼目は、稲刈り後の田圃をキャンバスと見立て、ここに作品を設営することにありますが、今でも日本人の主食であるところのお米を栽培する神聖な田圃に、所有者や耕作者とは関係のない者が土足で入り込み荒らすとの思いもあり、また、作品の撤収後には、何も残さない約束で、利用の許可を得ているのですが、冬の田起し時に、竹の端切れや、結束に使ったビニールや鉄などの紐が耕運機の刃に絡まると言った苦情や指摘をいただき、恐縮することもあり、毎回毎年、反省し、撤収後のチェックを確実に実施し、何とか今日まで、理解と寛容に支えられ、実施して来れました。

何度かは、もう貸さないと告知された田圃もありましたが、総体としては深い理解に支えられ、利用させていただける信頼関係を保っています。

また、田圃の匂いについての発見に言及します。

かつて子どもの頃に嗅いだ土や藁の匂いとは異なり、何十年ものブランクの後、接した匂いは、腐敗の臭い、硬く痩せた土、微生物や昆虫の気配のない言わば死んだ土の印象を持ちます。

化学肥料や農薬の影響なのか、今の農業の状況を見せつけられる思いがします。しかし、時代の変化は少しずつですが現れ、最近では減農薬、有機肥料へシフトする栽培も見られ、かつてのいい匂いの田圃がもどって来ることと、受止めます。

ウ　参加者そして作品

最初は、仲間内から人のつながりで、作品制作の参加者を募っていましたが、かわら版（ミニコミ紙）や作品を見ての参加者、地域の幼稚園、小中学校、そのPTA、主旨に共感しての参加者など、少しづつですが、分野や世代の広がりを得て来ています。

一方で、参加のモチベーション、魅力を、如何に培い、育むかの課題が、参加を重ねるに伴って、大きく重たくなって来ている状況です。

参加者の顔ぶれに呼応して、作品の内容も大きく左右されます。

個人＋助っ人による作品、大勢の人的パワーによる作品、時間不足の作品～構想との乖離、大人と子どもの作品～家族、学校のケース、また造形作家や建築家、

造園家などの作品など、年令、グループ、職種、これらが複合し、鑑賞する側には、多様で、何かの発見がある作品が、毎回毎年、創出されます。

エ　仕掛け～誘導

・スタンプラリー

作品の分布に合わせて、竹で作ったハンコとスタンプ台を鑑賞ルートに沿って設置し、作品案内の用紙にスタンプを押して回り、完成すると、竹の筒に入った花（れんげそう）の種がもらえるお楽しみ。

・みちくさアート

鑑賞者の参加により、作品の密度・質を上げて行く参加型作品を設定し､作品づくりの楽しみ体験や、見て回る楽しみの付加を企画し、第11回より実施。

・竹の工作十竹トンボ飛ばし大会

竹の工作は、第１回より開き、子ども達の楽しみとして企画していますが、むしろ大人の方が熱中する程に､物づくりは本能につながる行為に思えます。

また、工作の内容は笛や竹トンボで、出来上がった竹トンボを飛ばし滞空時間を競う､飛ばし大会を、第５回より実施しています。

オ　屋台～模擬店

大勢がにぎわい、はれの場を創出することも、作品を見ていただくきっかけ､呼び水として大切な要素と、第１回より実施している催しですが、年々、人のつながり広がりから、充実して来ています。

地元大草区の「婦人会」､「ふれあい太鼓」､「ぼだい樹」、そして、桃花台の「こまきあんず」､「あつまろ会」、そして「こまき市民活動ネットワーク」の参加を得て来ています。

「はれ」の舞台には不可欠の、皆さんがわいわい飲み食いし、会話が弾み、限られた一時を楽しむ、出店する側も、訪れる側も、この雰囲気の共有の場。

12回の中には、雨に祟られ、寒さに凍える時もありましたが、これこそが屋外、自然の中での催し。

その時の大変さも良い思い出になります。

カ　音楽祭

もう一つの「はれ」の舞台に欠かせない催し物が音楽祭で、当初から兎に角お金が無いから、趣旨に賛同していただき、演奏や歌うことが出来れば、それでいいと言う有志の出演で成り立っています。

地元の「ふれあい太鼓」をはじめ、「バイオリン」「胡弓」､「オカリナ」､「こかりな」､「ギター」､「オーストラリアの民族楽器」、昨年は「舞踏」も加わり、数があることの相乗効果を実感しました。

上記以外にも、同時期に開催される、地域や小牧市内の行事との、様々な連携。

竹の流れについても、竹炭に焼くことに関する連携の充実、そして、生活や自然への還元への展望。

これらは、ここ数年に実現して来たり、芽が出て来たことで、豊かさの本質である多様性や重層性が、立体的に大きな総合となってゆくプロセスにこの「バンブーインスタレーション」は位置していると実感しています。

この経過と成果を報告し、記録することとします。

2　改善と充実

a　表彰・顕彰

2001年（平成13年）より、今までの実績や、様々な意見を受けて、思考錯誤し、作品を顕彰する方向が出てきました。

まず、試みとして、全ての作品に、各々独自の賞を与えることを実施しました。

例えば、「さわすけくう賞」。

これは、爽やかで素敵な空間を縮めた、意味を取去るも臭わせる命名の賞を設定し、参加作品、全てに賞与するものでした。

2002年（平成14年）では、前年の不評を受けて、大賞＝八田川賞、銀賞（２点）＝東洞賞，西洞賞、新人賞＝筍（たけのこ）賞、そして、参加の回数が９回に達した参加者に、大草賞、これらの賞を決定し、実行委員会のメンバーで審議し協議し、決定し授与しました。

2003年（平成15年）も、前年と同様の賞を、実行委員会のメンバーで選定し、授与しました。

しかし、実行委員会の内部での審査では、建築や美術関係が専門であるメンバーとそうでないメンバーとの、作品に対する評価や考えに相違があり、調整が上手く行かないことを超えて、選定したのでしたが、実

行委員会の総意としては、不十分さが残りました。

2004年（平成16年）では、過去２年の実行委員会内部での審査は、無理があるとメンバー皆が感じ、また、賞を受ける側にとっても、得心が行かないとの声も聞き、さらに、対外的に、作品を観る人たち、地域の関心、マスコミの反応などについても説得力に不十分であるとの、実行委員会としての見解が出て来ました。

これを受け、外部の客観的な審査により賞を決する方法を取ろうと、メンバーの人的広がり、ネットワークから、以下の方々に審査をお願いすることが出来たのでした。

審査員

◎石黒　鏘二（名古屋造形芸術大学学長，造形作家）
○加藤　大博（名古屋経済大学短期大学部教授，造形作家），
岸　　雅裕（愛知文教大学副学長，歴史家），
石川　浩一（メナード美術館館長，美術史家），
副島　孝　（小牧市教育委員会教育長）
（◎＝審査委員長，○＝副審査委員長）

また、賞についても以下の内容に整備しました。

表彰内容

八田川賞　～最優秀賞（１点）
東洞賞　　～準優秀賞（１点）＝地域的に
西洞賞　　～準優秀賞（１点）＝作品的に
アイデア賞～アイデアに秀でた作品に（１点）
ユーモア賞～ユーモアに秀でた作品に（１点）
筍賞　　～新人賞（数点）
審査員賞　～審査員が評価する作品に（５点以内）
バンブ－賞～市民賞（１点）＝鑑賞者の投票で選出する作品に

補足しますと、アイデア賞、ユーモア賞、そして、審査員賞、また、バンブー賞を新設し、様々な賞により顕彰することを図りました。

b　参加費について

毎年、基本的に運営費用は、「おおくさ探険隊」や実行委員会のメンバーの持寄り、また、寄付、助成金、また少しの活動事業収益で、賄って来ていました。

毎年、７月の最終の土日に開催される桃花台ニュータウンの「桃花台まつり」に参加し、風船吊りゲーム等による収益が、大きな活動費となりました。

また、期間中の土日祭日には、模擬店～飲食等の屋台を、地域のいろいろな団体の参加をいただいておりますが、ここからの支援もあります。

しかし、年々の開催に伴い、パワーやエネルギーの減少、メンバーの生活環境の変化、メンバーの入れ替りなど、上記の活動費確保では、メンバー個々に負担が大きく、何らかの見直し改善が求められる様になって来ていました。

年々の活動の実績に伴い、マスコミ～新聞、TV、ラジオと取上げてくれる様になり、また、地域や人のつながりの中でも、知られ楽しみにしていただく、恒例の行事と認知される様になって来ています。

しかし、こうした、外での評価と内での大変さのギャップが大きくなって来ていたのも、厳しい現実でありました。

また、竹切り、作品制作、設置撤収、鑑賞など、様々な場面や時間での事故への対応としてのイベント保険の必要性もあり、作品制作、及び模擬店への参加について、参加費をお願いすることとなりました。

作品参加については、98年より2000円、04年より5000円と上げさせていただき、模擬店については志しをお願いし、今日に至っています。

c　実行委員会

メンバーの移り変わり、メンバーが社会的に中心的世代への年令を重ねて～十年余の時間の経過～来ており、一方で、参加者の広がり、仲間の広がり、定年退職世代の参加など、人的な財産は、豊かになって来ています。

より良い､実行委員会のあり方を模索して来た中で、部会制度を組むことが出来る様な段階に、いよいよ熟して来たと、認識しています。

・企画広報、連絡調整＋事務局＋会計
・竹切り、運搬、竹林整備、竹炭・竹酢液つくり
・作品制作～募集、連絡、作品集
・催し物～模擬店、音楽祭、交流会

これらの部会を、人的にも内容も、分担連携し、確たる実行委員会の組織を､構築することとなりました。

2006年（平成18年）の新年度を迎えるに際し、バンブーインスタレーションの新しいスタートに、私たちメンバーも心新たに、活動をはじめます。

3　連携

多くの皆さんの理解や支援、協力が無くては、出来ないし、まして続けることも出来ないことであり、改めて、深く感謝します。

a　大草区

ア　大草区自治会

先ず、場所～拠点の確保が、第一のことであり、地区の公民館～大草会館、そして、北側の駐車場の利用を快く許可していただいたこと、感謝です。

当時、北側の駐車場は、半分はゲートボール場に使われており、ここを含めて利用出来たことは、改めて、有難かったと思います。

そして、テント、机、いすなど、備品の利用も自由に出来る許可も大きな支援でした。

その後は、公民館を利用しての区の様々な行事や活動の調整をしていただき、心強い応援であり、取分け、区主催のウオークラリーについては、開催時期設定にも配慮いただき、今日に至っています。

また区発行の地域紙「大草だより」にもバンブーインスタレーションの情報を、掲載していただき、大草区民の皆さんへの情報発信や、このイベントの周知にも寄与していただいています。

さらに「おおくさ探険隊」の活動の一つであった「川の観察」の内、水質検査については、区の活動に引継ぎ、より充実～区内17箇所、検査項目10種類に充実し、今日も実施していただいています。

イ　竹林所有者

区の理解、了解をいただくと共に、竹の使用を快く許可していただいた所有者の存在が無ければ成り立たないことであり、感謝です。

最近では、うちの竹も切って欲しいとの依頼も立ち話の中から出て来たりで、竹の切出しに対しての理解も浸透して来ています。

ウ　田圃所有者，耕作者

作品の展示場所として、最初のアイデアが稲刈り後の田圃の活用でしたが、本当に突飛なことであり、無理を受止め理解していただけると、こちらで熟慮した上で、お願いに上がり快諾していただいた結果、田圃が、確保出来たのでした。感謝するのみです。

その後、毎回毎年のこととして、観ていただき、理解していただき、利用の許可をいただける田圃が増え、利用後の不始末を超えて、現在も使用させていただいています。

エ　大草婦人会

２年目よりお願いし、メイン会場である大草会館での、お茶の模擬店を、現在も開いていただいています。「バンブ―カフェ」と命名、バンブーの愛称が定着する端緒になったのではないかと振返ります。

数年後には、婦人会の年間の活動スケジュールにも組込んでいただき、うれしい限りです。

オ　大草ふれあい太鼓

この地域立地の和太鼓の会からは、婦人会のお茶だけでは物足りないと、前向きな対応をいただき、ビールと焼き鳥の屋台を出していただける様になり、屋台の設えも整い定着し、欠かせない模擬店です。

また、本来の太鼓の演奏についても、11月３日の文化の日、音楽祭にも出演していただき、メインの出演者になっています。

b　東部地域

ア　篠岡地区区長会

中日、朝日、読売、毎日の各新聞に取上げられる様になるとともに、市の広報、桃花台のミニコミ紙にも載せていただける様になり、地域限定の行事から、ステップアップを考えていた時、開催時期に合わせて、毎年発行するミニコミ紙「かわら版」配布を、桃花台と大草地区から、小牧市の東部地区全体～約12000戸への全戸配布を、篠岡地区区長会の会長以下役員の皆さんにお願いし、市の広報などの配布と合わせての配布の協力を、快諾していただき、

東部地区（篠岡地区）全域配布が実現したのでした。ここでも、感謝しかありません。

イ　篠岡中学校・美術クラブ

美術の先生が、生徒たちと作品制作に参加すると連絡をいただき、とても嬉しい出合いでした。

直接のつながりが無い中、情報をキャッチしての参加であり、この行事の確かな反応を得て、とても勇気づけられたのでした。

その後も先生の転任まで、毎年参加していただき、小中学校への情報発信の大きな支えとなりました。

ウ　大城小学校

メンバーの何人かは、子どもの成長と共に、地域の小学校、中学校のPTAの役員となり、PTAのバンブーインスタレーションの作品参加に繋がって行きました。

特に、大草区の子ども達も通う大城小学校とは、バンブー最初の年に、校長先生の理解を得て、校舎内の展示スペースに、子ども達の図画と共に、かつて、この地域に生息していた、昆虫や植物のパネル展示をさせていただき、乗り入れの連携を実現出来たのでした。

この時の校長先生が、現教育長であり、第11回よりの審査員を快諾いただき、時を経ての連携、協力をいただき、良い巡り合わせとなりました。

エ　光ヶ丘中学校

やはりメンバーがPTAの役員として関わる様になって、作品参加へと繋がっていきました。

特に光ヶ丘中学校は、メンバー以外の歴代の役員の皆さんが、連携を受継いでいただき、又、中学生の竹切出しへの大勢の参加の時もあり、学校が開催する「地域ふれあいフェスティバル」と住みわけし、連携は今日も続いています。

オ　大山・江岩寺

ここに拠点を置く郷土史研究会のメンバー～当時は中学生の有志が、模擬店を出すかたちで連携をしています。

若い世代の自主的参加はとても貴重であり、中学卒業後はご無沙汰ですが、またの連携を思います。

c　市民団体

ア　こまきあんず

桃花台在住の有志の皆さんの団体で、小牧の人々と言う意味の命名と聞いています。

住んでいる小牧のことを知り考え深めていく活動の中で、会期中に模擬店を出していただき、また、音楽祭や交流会へも新しい仲間をつれて顔を出していただく心強い団体です。

イ　あつまろ会

桃花台に住まう皆さんを中心に、夫婦での参加がルールで、月一の飲み食べ歓談する会で、時には、遠出し外の空気を満喫する会で、人と人との繋がりから生まれたグループです。

アートには縁遠かったのですが、メンバーの一人が工作教室を主催していて、一時期ここが、集まりの場所であったこともあり、会の有志の作品参加がきっかけで、2001年より参加。

今では、最優秀賞の八田川賞を勝ち取る有力候補になっている会で、模擬店にも参加していただいており、バンブーを支える頼もしい会です。

ウ　ぼだい樹

バンブーインスタレーション実行委員会の新しい拠点として、「おおくさ探険隊」の代表に、ここのオーナーが就任して以来、本格的にメンバーの会合、たまり場として、また、出合いや連絡、情報の場、新しいメンバーの出合いの場でもあり、さらに竹炭の窯を自力建設し、竹炭焼きの活動の場でもあり、2004年（平成16年）からの拠点です。

オーナーご夫妻の理解と参加と寛大により、気楽に楽しく出入り出来る場所であり、感謝です。

エ　篠岡里山竹の会

作品制作に使った後の竹の処理に困っていた頃、以前から知合いの２人と飲み交わし、会話が弾む中で、この困っている状況をお話したことが端緒となり、また、上記の大山・江岩寺の住職との繋がりが出来ると共に、境内の裏の竹林の南の平地を使用できることとなり、瞬く間にドラム缶の竹炭窯が出来、メンバーも集まり、会も正式に結成され、2004年には、バンブーの竹を竹炭にする連携が実現しまし

た。

皆さんの多くは、桃花台に住まい、仕事以外のつながり、アウトドアライフが共通の趣味で、住職の受け入れる考えや寛容と相まって、このスピードでの実現充実となっています。現在では、手づくりの大、中、小、３つの窯で、定期的に窯を焚く、大人の会であり、この会も心強い連携仲間です。

カ　愛林会

桃花台全体を管理する県の外郭団体である桃花台センターの呼びかけで結成された団体です。

メンバーは桃花台に住む人たちで、桃花台の環境～里山～緑の整備保全を進め、また子ども達の自然体験の場を提供することも活動の内容としていて、毎月１回の定期活動と、メンバー個々の自主的活動の２本立てで、住むエリアに働きかけています。

こうした中、桃花台と大草地区の境に広がる丘陵～通称「お城山」にも、放置された竹林がありますが、両地区にまたがり広がり、多くは大草区の個人所有の竹林であり、所有者と整備したい野外活動家との出合いの見通しが出て来ました。

このつなぎ役として、「おおくさ探険隊」に相談があり、今年06年から、上記の「篠岡里山竹の会」も加わり、連携し連動しての竹林整備が進んで行くこととなりました。

キ　大草25会

大草に在住の同期の仲間の会で、初期数年に亘りカンパの支援、ここ数年は、作品制作での参加で、2004年の八田川賞（最優秀賞）を勝取り、一挙に注目されるグループとなり、バンブーのアートの面を支える会として、頼もしい存在となりました。

d　事業所

ア　舟橋植木

個人的には、最初より呼びかけに応じていただきコンセプトの確たる優れた作品を、毎回毎年、今日まで、全て参加していただき、感謝です。

一方で、ここ数年前より、竹の切出しや運搬には人的にも車的にも協力いただき、重ねての感謝です。

イ　波多野建材

こちらは、竹炭についての交流連携から、運搬の支援をいただき、感謝です。

同じ大草地区に住み活動する仲間として心強くもあります。

ウ　阿石金属工業

大草地区の道路に被いかぶさり通行を阻害する竹林の整備に際してなど、快く協力していただける心強い存在で、感謝です。

エ　亀谷工業所

初期の頃数年、竹の運搬に車の利用に便宜を図ってもらい、とても救われた思いを回想します。

オ　梶田設備

同様に、車の利用に協力していただきました。

e　小牧市、小牧市教育委員会

後援をいただくこと以外にも、作品制作への参加という形で、応援をいただいて来ました。

環境政策課や環境系市民団体のエコネット、以前には、こまきエコロジー運動市民の会（えころ）、各々に環境の視点からの参加です。

また、市の広報には、毎年写真付で、参加者募集の記事を掲載する応援をいただいています。

そして、審査員に、副島孝教育長が快く就任していただき、作品の顕彰に寄与していただいています。

そして、小牧市の文化の振興に於いて、連携や協働を、さらに推進して行くことが出来ればと希望します。

また、環境～緑の保全、水質の改善など、さらには、農業の振興、これは桃花台の有志と大草の農地所有者との協働による耕作や栽培の継続、収穫の喜びや食の安全へと繋がって行きます。

今後の行政との連携を期待します。

f　名古屋造形芸術大学との連携

1989年（平成元年）初夏、「おおくさ展」が、本大学のＤギャラリーで開催されたことを契機にして、1994年（平成６年）中秋、「おおくさ博覧会」を地域の有志が開催することとなり、この博覧会の中の催し

物の一つとして、バンブーインスタレーションを開催し、以後、2005年（平成17年）には12回を数えることが出来たのでした。

ここまで継続出来た要因は、様々にあると認識しておりますが、大きな要因の１つは、本大学の存在があると認識します。

今でも、この行事は造形大学がやっていると思っていた、との発言を耳にする程に、行事のメインの内容～竹の作品づくりは、造形大学とは不可分と思います。

バンブーインスタレーションは、竹をメイン素材とする作品で、最初の年は、８作品参加がありましたが、本大学（短大）OBの参加が２つありました。

以降、本大学のランドスケープ、インターメディアの２つのコースからの参加が、大きな力となりました。

大学の地域との密接な関係づくりは、今日でこそ、一般的に認識される様になって来たことですが、既に、作品参加を通して、地域との交流が展開されることとなりました。

一つのピークは、秋の芸術祭におけるキャンパス内にバンブー作品が３つ、バンブーインスタレーションと連動して制作され、子供達を先頭に地域の人たちが、大学を訪れる契機となった1996年（平成８年）と振返ります。

以降、現役の学生とともに、何人かのOBが、個人やグループで参加し、作品の量と質の両面に亘り、大きな力を与えてくれました。

また、バンブ－インスタレーションの会期に合わせて、本大学のDギャラリーの１週間の利用を、優先的に確保していただくことを３年目より配慮していただき、バンブ－インスタレーションの内容や実績、また近年は、作品の展示も加え、バンブーをより良く知っていただく重要な場となっていると思います。

特に、新入生にとっては、通学の行き来に見かける風景の中に散見する竹の作品へのかすかな関心を、Dギャラリーにて、確かなものとする場となっていると理解しています。

そして、表彰の項目で触れました様に、本学の石黒学長に審査委員長を快諾していただき、その年04年より、大学と地域との連携の新しい段階に突入したと認識しています。

これはバンブーインスタレーションがオフィシャルに、大学に受入れられ、エポックとなることでした。

芸術系の大学が、この地に立地していることの価値や重要性を、改めて認識する中から、この地域、引いては、小牧市の文化の充実へと、広がり深まることを、思い描きます。

そして、ここを発信源として、市内の他の文化に関する活動を展開している団体、そして小牧市とも協働し、小牧市のアート面の文化の振興に寄与出来ることを、願って止みません。

g　文教大との連携

愛知文教大学は文化国際部の単科大学ですが、四大、大学院があり、また、特徴として、主に中国の留学生を受入れている、学長の言葉を借りれば日本一小さい大学でありますが、文教大との交流は2004年からとなります。

文教大には歴史分野の先生方がおられ、日本の中世の歴史に関わることからの連携となりました。

この大草地区には、戦国時代の城跡である、大草城の遺構があります。

初代城主は、西尾道永であり、この城主が、曹洞宗の大叢山福厳寺を開山し今日に至っています。

また、桃花台ニュータウンの内、この城址に隣接するエリアの地名を城山とし、歴史を受継いでいます。

愛知県や小牧市、また郷土史家が、文献や現地調査等により、存在は確認されているものの、確かな全容は、まだ押さえられていない状況にあります。

私も、ここに生まれ育ち、ここを拠点に生活し活動する者として関心があり、上記の様な現在の状況や背景を踏まえ、この大草城址を公園として整備し、桃花台や大草の人々が利用し憩えることが出来、併せて緑地の保全、良好な景観形成をと願っています。

この城址あたりは、かつては雑木林の里山、その中に開墾された畑や果樹園があり、人の手が入った良好な景観を保っていましたが、やがて放置され、竹が勢

力を伸ばし、現在は、一部に畑が残るのみで、放置された里山は、竹林、荒れた姿を呈しています。

また、桃花台の開発に伴い、城址の北側は、団地に変貌し、現在訪れると白山神社の小さな社が祭られ、小牧市教育委員会の案内板が立てられ、ささやかに歴史を伝えている状況です。

これを受けて、バンブーインスタレーションの一連の中の竹切りの場所としてここ数年、都合５年、この白山神社の参道の取口に面する竹林の整備を兼ねた、竹切りを実施して来ています。

こうした細々とした作業の実績を後ろ楯に、かねてより面識のあった文教大の岸副学長に、考えを聞いていただき相談申し上げ、文教大の歴史の先生に、現地の実測調査をしていただく、ご協力を得ることが出来ました。

荒れ放題の竹林の中での調査は、藪蚊や見通しの利かないこと、進むに困難な状況と、調査は大変でしたとのお話を、後に聞き、申し訳なくも有難く、今後の竹林整備への思いを新たにしたのでした。

これが、2004年（平成16年）の10月のことで、2005年のバンブーインスタレーションの開催期間の11月３日（木）に、本大学のＤギャラリーで、「お城山についてのミニシンポジウム」～小牧市教育委員会文化振興課の中嶋課長、文教大より深貝講師のお２人に講師として、背景や経過や調査報告をいただき、現在の状況を知ることとなりました。

造形大のＤギャラリーで、文教大のレクチャーと言う協働～隣接する２つの大学の１つの交流が実現し、合わせて、竹切りの場所の歴史への着目、景観形成の端緒と、いくつかの狙いを込めたミニシンポを、実施することが出来たのでした。

これからのこととして、文教大からは、今回のミニシンポを受継ぎ、文教大が中心となり、このお城山の顕彰を進めて行くと、発言していただき今後の展開が、とても楽しみとなりました。

また、小牧市の今後の対応としては、現在、小牧山の信長時代の調査や市内の土地区画整備に伴う各所に発掘調査が、これから数年継続してあり、予算配分には余裕が無いが、これらの後に、この大草城址の発掘調査にも移れるのではないか、とのコメントをいただきました。

また、その後、郷土史家の中山さんとの面識も出来、さなる広がりも期待出来、ここに、関係の顔ぶれが見えて来て、これを端緒とする今後の展開が、楽しみになってきました。

h　メナード美術館

元より、小牧市に於ける、芸術の殿堂，シンボルとして、本大学・名古屋造形芸術大学とともに、小牧市の大切な資源、財産であります。

また、地元小牧市での関心や評価より、市外、日本各地での評価が高く、全国区の存在です。

コレクションの質と量、ともに充実している一方、鑑賞のローテーションが間遠く、残念です。

如何に、この宝を生かしていただくか、今後に期待するばかりです。

造形大学とメナード美術館が連係し、市民への各種の魅力的な講座を開いていただく事業が展開されて、嬉しくもあり、時間が許す限り、訪ねて来ました。

こうした中、2004年（平成16年）に、審査員、バンブーインスタレーションの審査員をお願いする為、面識も無く、仲介いただく人も思い付かず、無謀にも直接、石川館長をお訪ねし、バンブーの趣旨や経過をお伝えし、審査員のお願いをしたのでした。

他の審査員の顔ぶれを後ろ楯にお願いしたのですが、本当に快く、お受けいただき、ホットする間もなく、早々に退出したのでした。

専門は、西洋の印象派であり、バンブーに関しては門外漢であり、審査出来るかどうか、お役にたてるかどうか、心もとないとのお話もされましたが、元より、審査員のメンバーとして、望める限りの最高の顔ぶれを、バンブーインスタレーションの次の大きなステップアップ、展開を考える中では、他の審査員への思い同様、石川館長も、以外は考えられず、心の内では、了解を得られるまでお願いするとの覚悟で、お願いに上がったのであり、快くお受けいただき、緊張が解け早々の退出となったのでした。

ご多忙の中、タクシーにて、一般の見学者には歩いて１時間余を要する作品鑑賞を、時間を割いて、観て

いただき、拘束される審査会にも、紳士的に参加していただき、ボランティアでもあり、恐縮するばかりですが、１時間程の審査の中で、全ての賞が選ばれて、審査員賞の選定のほっとした時間もあり、バンブーの次の段階に突入している実感を味わい、身震いする時を、共有させていただきました。

昨年2005年の審査には、１年目の緊張を再びに感じながらも、図々しくも、メナード美術館のグッズを、受賞者への副賞にと無心したところ、これも快諾していただき、赤面ものでしたが、審査員方の存在が醸し出す芸術の空気に浸っての失礼と、ご寛容をと、念じたのでした。

i　桃花台新交通

桃花台新交通の存続が、2005年（平成17年）バンブーインスタレーション終了後より、新聞報道で賑やかで、今後の進み行きが注視されますが、数年前には、桃花台新交通の本社に接する中央自動車道よりの初日の出を迎える行事に際し、協力のオファーがあり、お手伝いしたことがあります。

これ以降、ピーチライナーの駅や車内に、バンブーインスタレーションのポスター掲示の協力を得られる様になり、現在まで続いています。

恒例の交流会には、飲食するので、公共交通による飲酒運転をなくす意味からも、活用をと考えます。この地域の、ピーチライナーと巡回バスなど、公共交通の整備充実を、強く願うところです。

j　名古屋鉄道

また名鉄が、名鉄沿線の名所やイベントを生かしたハイキングコースを、名鉄利用の一環で計画し、一年～春夏秋冬の各シーズンごとに、いろいろなコースを小冊子にまとめ、利用者やウオーキング団体に呼びかけ、最寄りの駅に置き、情報発信しています。

この中、秋のハイキングコースの一つに、名鉄小牧線の味美駅よりスタートし、朝宮公園、八田川緑道を経て、落合公園、下原窯跡の遺跡をめぐり、春日井市より小牧市大草に入り、ピーチライナー桃花台東駅がゴールのコースが入れられました。

昨年、バンブーインスタレーションを正式に入れたコースとして、2005年（平成17年）11月３日（木）の文化の日に設定し、組み入れていただき、大勢のバンブー鑑賞者を得ることが出来ました。

今後も、継続していただけると聞いており、この広がりは大きな力であり、大変うれしく受止めています。

また当日のピーチライナーの利用者は、2100人程の増であったと後日聞き、利用促進に寄与出来き、嬉しくありました。

2004 審査員賞「a passage 一回廊Ⅱ一」BEORUDE

4　竹の循環

身近に広がる里山は、多くは竹が勢力を広げ竹林に。
でも、竹林は、放置され荒れた状態。
竹は、５年で正竹（おとな）になる程に成長が早い。
（適切に切出し整備すればエンドレスに竹は使える。）
整備された竹林は、景観や環境としても喜ばしい。
無尽蔵と言える程の使える竹は、素材として有用。
竹で何かを創る。
創ることの喜び。
観ることの喜び。
竹への働きかけを思い描くが、一人で、個々に、無関係では、広がらないし、しりつぼみ。
人のつながり、呼びかけで、みんなでやってみよう。
竹の作品～竹のアートを何処に設営しようか。
自然のなか、生命の象徴～水～川への働きかけ！？
現実的には、地面がいる。
稲刈り後の田圃はどうか。

使用出来ないものか。
竹林、そして田圃。
理解、了解、時間限定で、お願い出来れば有難い。
最初は、ほんの限られた広がりが、少しずつ広がり。
何とか、秋の11月３日文化の日を中心に９日間。
「おおくさ博覧会」の中に盛り込めた。
苦慮の末の名、バンブーインスタレーション。
共通の活動の広がり～ｉｎおおくさ。
毎回毎年は西暦で。

今年は、
バンブーインスタレーションinおおくさ2006

祭のあとの虚脱感は、竹のファイヤーストーム。
燃しても燃しても沢山の竹、竹、竹の山。
会話の中で、竹炭に出合い、専門家の協力。
そこから、自前自力の竹炭窯での竹炭づくりへ。
出来た竹炭、副産物の竹酢液は、有用で役立つ。
匂い消し、ご飯炊き、入浴、マイナスイオン。
部屋の演出にも使える。
もちろん燃料としても。
残りも集めて袋積めし、川に活けて水の浄化。
土に返して土壌改良、除虫にも生かし。
竹の枝を集めて竹ほうきにも出来た。
話の中では、ざるや篭、すだれや物干など。
今の内なら、細工、組み方、編み方、技術もある。
何より先ずは、筍の食彩、旬の食材。
竹と人との良い関係。
竹の循環。
美しい風景。

桃花台と大草を結ぶ～人と人との出合い交流、これには、生活の広がりを共有する旧大草地区（これを表す意味で平仮名で「おおくさ」と書きますが）の環境～溜め池や川、里山や田畑などの自然環境、集落、街、住宅、生活道路、農道、公園など人工的環境、小学校、中学校、名古屋造形芸術大学，愛知文教大学、会社、企業など、様々な要素が、個々に住み生活する営みのフィールドであり、ここを、共有する意識を育てたい。

故郷の意識、特にここで生まれ育つ、子ども達にはここが故郷、縁ありここに住まう大人達には、ここが新しい故郷。

バンブーインスタレーションの背景には、共有する故郷の思いが、なくてはならないと考えます。

a　里山～放置された竹林の整備

かつては、入り合の里山であれ個人の里山であれ、日々の生活の中で、密接に関わり、それが手入れともなり、美しい里山に保たれていました。

しかし、状況は大きく移り変わり、集落周囲の里山は、日常生活の中では、関わる林・山ではなく、入らないで眺める里山になっていきました。

この状況での生態系の中では、竹が最も生命力があり、他の植物をどんどん駆逐し勢力を広げていきます。

統計によれば、一般の里山・雑木林の分布域が、宅地開発などで、どんどん減少していく中で、唯一竹が、分布域を保つどころか、むしろ広げていると聞きます。

こうした背景からも、竹を素材にした作品展という、素材についてのイメージが、固まってきました。

b　野外の展示～インスタレーション

屋外の、しかも、この「おおくさ」の田圃の中に、展示する「インスタレーション」を、構想しました。

竹を用いて、田圃の中に、ここの景観に働きかける、期間限定の、立体造形の出現を思い描きました。

竹は、地元の竹林所有者のご協力により、利用させていただき、竹の利用と竹林整備。

田圃の広がりは、「おおくさ」の風景の基盤を成し、この中で、是非、作品を制作・展示し、鑑賞し、中に入り込み、触れ親しんでもらいたく思います。

利用期間は稲刈り後、田起し前の約２ケ月限定。

単に「はれ」としてのイベントではなく、住人一人一人がこの地域を、共通の住み生活する場と認識し、制作や鑑賞に参加するイベントとしての位置付け。

c　竹～竹炭＋竹酢液～土～への還元

竹の処理の方法として、いままでは焼却の方法から、チップ化し敷詰め、また積上げ、自然に腐敗し土へ還る方法、そして、竹炭に焼く方法（副産物の竹酢液）。

ここ数年で、竹炭は実現出来、チップはもう少しの時間が必要。

自然環境、地球環境の意識、スローライフ、ロハスなどの、新しい意識が浸透して来ている時代の意志。

忙しく流れていく日常生活の中で、少し意識しつつ、今後も、楽しみつつ実践していきます。

d　水質浄化に竹炭を

竹の還元の行き先は、土に還ること。

竹炭や竹酢液が、生活の中に活かされ、また、川や地面に還され、河川の水質浄化にも活用され、やがて分解され、土になります。

自然に還る流れ。

水に意識は還り。
ここを流れる八田川に、意識を据え。
水は、全ての生命の源であり、根本。
里山や田んぼの存続は、八田川に直結しています。
この八田川を背骨に、広がるこの田圃の風景。
ここに意識を向け、足元の環境を再発見、再認識。
きっかけ、誘発剤に、この「バンブーインスタレーション」が、なってほしい。

5　新しい故郷

a　新しい風景

作品制作への参加、鑑賞への参加の呼びかけは、人のつながりのネットワーク、機関紙「かわら版」、又他の機関紙に、さらにマスコミによっています。

初年より「マイタウン桃花台」、また「小牧・くらしのニュース」、小牧市の「広報」、新聞各社、TV、ラジオなど、定着、充実してきました。

回を重ねるにつれての、制作者、鑑賞者の充実は、どうでしょうか。

開期中の見学会「作品見学ツアー」への参加は少なかったりですが、「見ましたよ」の挨拶がわりの声は、年々増えて来ています。

また、三々五々、散歩・散策しつつ見学する人が、目についたりで、定着してきたと実感しています。

この会期の頃は、気候もよく、散歩・散策には、もってこいの頃で、私たちの雑談の中でも、弁当とお茶やビールを持ってのピクニックに最適との話題。

これを、期間中、桃花台光ケ丘にある、旭ヶ丘第二幼稚園の先生と園児の皆さんが、ピクニックを実施され、新しい連携が実現し、今日も続いています。

幼い子ども達にとって、楽しく貴重な、自然体験のひとときとなっています。

さて、作品の点在する風景は、人の行動を誘発し、人のいる風景は、生き生きとして、新鮮で清々しい気持ちになります。

作品を観て回る人々の姿に、身近な人たちの顔に、また自分の気持ちを確認しても、心踊る気持ちを発見します。

この風景が、イメージしていた一つかも知れないと、思い返します。

ここから、産業廃棄物埋立地や処理場、そして水、川・八田川という重たいテーマへの、ステップアップを目指していくのだと思います。

b　大草と桃花台の意識

人と人とのつながりから、人の意識が広がり、この「おおくさ」の風景にも、目が向いていく様になって来たと思います。

季節のうつろい、暑さ寒さを感じること、晴れ、雨、曇り、天候の様々な表情、野鳥の姿、さえずりの声、通学、通勤、仕事の移動、犬との散歩、また土手焼き一斉のゴミ拾い、ウオークラリー、秋祭り、などなど、これらの中に、バンブーインスタレーションも居場所を与えられたと受止めます。

小学校や中学校の年間の様々な行事が、行動を誘発して、町と田舎の交流が、深まって来ている印象です。

時代は、右肩上がりの経済成長から、緩やかな成長へと、また人口が、人口構成が、大きく変わり、個々の主体的考えや判断、行動が、求められています。

豊かな生活の広がりの、この「おおくさ」の環境で、住み続ける意識が確認され、各々が、各々の人生を、各々に展開してゆく、魅力的で快適な場所となる様になってゆく可能性を、桃花台や大草の人たちとの交流を通して、感じています。

c　篠岡地区の意識

小牧市の東部地区～篠岡地区には、多くの公共施設が点在し、これらの恩恵に預ることが出来、自分の住むこの地に目を向け、足下の豊かさや、一方の不十分さを、確認するところから、より具体的な把握が出来、故郷の意識も生まれ、深まってくると考えます。

この４月には、「ちごの森」がオープン、稚児神社、大山川、集落ごとの神社やお寺、果樹園、水田、小川の田園風景、一方で高速道路、工場、幹線道路の風景。

これらの中に、温水プール、四季の森、エコハウス、環境センター（ごみ処理場）、桃花台の小中学校、大小の都市公園、ショッピングセンターなど、数え上げれば、実に様々な施設や場所、自然があり、豊かな地域と評価出来ます。

これらを、資源と認識し、どうすれば、より有機的な地区にして行けるか、ここにアートや市民の出番があるように思います。

d　小牧市内への波及

「小牧山アートフェスティバル」が昨年開催され、アートが、小牧市内に目に見えて来ました。

連携の方向も見えて来ており、今年は、一歩前進の年となる様に、積極的な働きかけを、と考えます。

「市民美術展」は伝統ある美術展であり、バンブーが１２年の実績と言っても新参者であり、この「市民美術展」とも、会期も全く同じであり、連携をお願いし、秋の文化週間として、この時期の空気をつくり出すこととなれば、素晴らしいことと思います。

e　近隣への波及

「かすがい文化振興財団」の有志の皆さんが、昨年バンブーインスタレーションに作品参加していただき、持っておられる機関誌でも、充実した内容のページを作成し、情報発信ていただきました。

今年も参加いただけると聞いており、楽しみです。

その他、市民の個々人の広がりからの波及は、集まり散じてですが、昨年の特例は、中部大学の卒業生が故郷の広島市から、遠路、作品参加してくれたことがありました。

その年々の、遠方からの参加も、今までにもあり、これも楽しみの一つになります。

出来れば、本大学の対外的交流の中から、作品制作への参加へと展開して行けば、素晴らしいのですが。

f　情報発信

様々なメディアによる、情報の受発信は、今までは受身的で、なかなか積極的には展開出来ていませんでしたが、実行委員会の組織編成が、しっかり確立すると共に、今年からは、出来ると考えています。

思いは、どんどん広がりますが、この地域の出身者、本大学のＯＢを含めて、この地を故郷とする、地域外の人々との連携も、考えられると思います。

さらに、この地、故郷からの世界に向けての発信も。

6　今後に向け

a　運営

この「バンブーインスタレーションinおおくさ」は、私たち「おおくさ探険隊」のメインの活動として、実施されて来ていましたが、企画、折衝、告知、広報、手配、受付、作業などの実務は、エネルギー、情熱、人と人の広がり、の裏付けがあってはじめて、遂行出来てきたのだと痛感しています。

しかし、一部の担当者に、どうしてもしわ寄せが来てしまい、一方では根本的な改善を模索していましたが、「おおくさ探険隊」が母体となり、実行委員会を設立し、バンブーインスタレーションの運営を独立した組織で行なうことを実施して来ましたが、大きな改善に至っていませんでした。

そこで、作品の客観的な評価と表彰を確立することと合わせて、2004年（平成16年）第11回より、構成メンバーを明確にし、実質的な実行委員会を立ち上げ、組織の整備を、さらに一歩進めました。

2006年（平成18年）の今年は、新しい実行委員会として３年目であり、さらに組織を整えるため、この実行委員会の下に部会を設け、役割分担や人的配置をより明確にし、一部に負担がかからない組織をと考え、検討をすすめているところです。

12年継続し実施して来れた実績を糧に、さらなる飛躍の第一歩とする方向性を、メンバー自身の新たなテーマとして持ち、将来に向けての展望が見えて来たとの思いがあります。

また、3年目から竹炭を製作・製品化している江南市在住の小出さんとの出会いから、作品に使用した竹を全て焼却していた状況から、全てを引き取っていただくことが出来る様になり、さらにその後、桃花台の有志の皆さんの働きにより、この地域で竹を炭に出来る様になり、さらに、「おおくさ探険隊」でも竹炭の窯を作り、分担し切出した竹の始末が出来る様になり、竹という自然の資源の有効利用～循環にもつながり～が出来てきて、成果品の竹炭や竹酢液は、生活の中で活用出来る様になり、さらに、地域の川の水の浄化にも役立つこととなりました。

ここには、小中学生をはじめ、地域や有志の大人たちにも参加していただき、地域の共有する自然環境への働きかけとして、今後の充実を推進して行きます。

2005　竹切り風景

b　課題

ひと回り、12回を数えましたが、やはり幾つかの課題を持ち越し、また、新たな課題を与えられました。

ア　地元の一般の人々の作品制作への参加も出て来て、ものづくりの難しさ楽しさ、そして、田圃の現状を、自然の中での作品づくりを通して、体験することが定着して来た一方で、3年程の参加を体験すると、さらなるモチベーションが必要になって来ることも解って来ましたが、より深い参加意欲の創出が不可欠と思われます。

イ　また、特にこの地域につながりがなくとも、広く一般の人々にも、制作のよろこび、作品を通しての交流を体験していただくことにより、外部からこの地域への新しい風・空気を運んで来て欲しいとの思いは、12年経過した今でもあります。

昨年には、名鉄のハイキングが、多くの見学者を動員していただきましたが、先ず観ていただくこと、ここから、作品制作へと繋がってゆく可能性など、多様な展開から、広がることを模索して行きます。

ウ　初年から実施しているスタンプラリーは有効で、特に子どもたちには魅力のようで、達成の記念の品のこと、スタンプの工夫など、さらなる改善が必要であると思います。

例えば、子ども達にアイデアや運営の役割を分担してもらい、より子ども達の主体的、自主的な参加を押し進めるなど、可能性を模索したく思います。

エ　企画や運営への、地元や有志の積極的な参加・支援（大学、小中学校、区、各団体、市）を思い描く中で、実行委員会の下に部会を設けることで受け皿となり、しっかりした連携を構築したく思います。

オ　毎年秋の10月下旬～11月上旬の約1ケ月間を、この地域全体の文化月間と位置付けて、小中学校、本大学、文教大学、各々の団体等が開催する発表会や催し物を、この期間に集約・結集できないかとの思いは、市主催の「市民美術展」が、全くの同時期に開催されていること、さらに昨年の市制50周年の記念事業として、小牧山と小牧の市街地とを舞台に「小牧山アートフェスティバル」がありましたが、期間を合わせ連係できる見込みが出て来ました。

カ　さらに、竹林の手入れを、楽しみつつ、より多くの人々の参加で、実施できないかとの思いは、先の「篠岡里山竹の会」の活動、「桃花台・愛林会」の活

動、さらに、地元大草区の意識のある有志の出現と、連携に向けての動きが出て来ています。

これは、作品の制作者はもちろん、小中学生、大学生、一般の大人までの、共通・共有体験として定着出来ないか、との思いにも繋がって行きます。

キ　この「おおくさ」の環境をより良くしていく気持を、具体的な行動に結び付けて行くための仕掛け・仕組の必要性にも思い至ります。

例えば、既に実施されている大草区の行事への桃花台の人たちや有志の参加など。

（冬の土手焼き，春秋のクリーンキャンペーン等）

c　アート

野外・竹・時限性の作品展～「バンブーインスタレーションinおおくさ」は、当然ながら芸術性や創造性をその本質に備えています。

そして、地域性や社会性、さらに環境や循環を内包している行事であることを、特徴としています。

・地域の身近な素材「竹」
　～成長が早く、エンドレスに使用可
　～この国の雑木林がどんどん減少しているなかで、むしろ竹林は増殖しているという現状
　～田園風景に馴染み溶込む、あるいは埋没する素材
・合同で素材確保（竹切り）すること
　～竹林の状況や共同作業の体験
・野外展であること
　～地形，気候，力学，風景と作品
　～開放感の体験，誰もが作品鑑賞する，出会いや交流の広がり
・参加の広がり
　～個人から団体，園児から高齢者の広がり
　～この地域をメインに周辺への広がり，鑑賞者も地域も遠来からも
・関連イベントの充実化
　～スタンプラリー，竹細工体験教室，野外音楽祭
　～模擬店の充実と広がり（市民団体の参加）
　～交流会（作品を肴に）＋ファイヤーストーム
　竹とんぼ飛ばし大会～ファイヤーストーム
・そして、竹、竹炭、竹酢液の循環～景観の復活
　～竹林の再生，雑木林の復権
　～竹林＊竹＊竹炭＊川の水浄化＊大地の循環

バンブーインスタレーションで制作された作品は、これらを内包する行事全体の成果の象徴であることを受止めていただきたく思います。

実は、受け止めの深さ、理解により、極めて構想や意図にはヘビーな制約、規制が、厳としてあります。

一方で、自然の中で成立するためには、風や雨など自然の力への抵抗力が、ほんの10日程の期間であっても、欠かせません。

また、日常的には触れ、体感出来ない、大きなキャンバスである田圃の持つスケールや自然の複雑な色彩は、実際に制作に関わって実感できるものです。

一方で、バンブ－インスタレーションの懐の深さ、作品表現の可能性は、無限大と言っても過言ではなく、逆に、創作意欲をかき立てる創作の場であると、魅力の尽きない対象であると考えています。

かつて、クリストの「アンブレラ」からのヒントや刺激について触れたことがありますが、これまで規定して来たルールを超えての作品は、バンブ－インスタレーションの中でも１つしかありませんでした。

決められたルールを超えて、主催者の提示する趣旨に真正面に向き合い、主催者に働きかけ、ルール解除の要望を訴える参加者を、実は、切望するのです。

桃花台と大草の住宅群と集落とに挟まれた広がり～八田川に沿う田圃の広がりは、人の視界には素晴らしく程よいスケールと思うのですが、いざ創作する側の視界には、とても広い、大きなスケールに見えます。

いつか、この広がりに負けない作品をと、個人的には思うのですが・・・。

おわりに

先の紀要の「おわりに」に於いて、「継続すること」についての思いを書いていますが、こうして、第12回を数えることが出来るに至ったことを思うと、改めて、「継続すること」の大切さを認識します。

回を重ねるごとに、様々な成果を得、これが年輪の様に成長を記録して行くことを実感します。

その一方で、毎回毎年の様々な場面に参加したみんなのエネルギー・汗の結晶であることも合わせて思います。

続けることの大変さや労苦を超えての達成感、個々人それぞれの思いの集積が、次への推進力となります。

12年と言う時の経過は、一つの貴重な出来事を生み出してくれました。

最初の年の秋に丁度生まれた近所の女の子が、毎年秋のこのバンブーインスタレーションに触れ、いろんな出合いを体験し成長し、昨年は小学生として作品参加してくれました。大人とのグループとしてではなく、友達数人との参加、参加費用も小遣いを溜用意し、作品の構想もしっかりとあり、最終的な作品は構想には達しなかった様ですが、兎に角、知らず知らずに身に付けたルールに則り、自分達の力で作品を制作し、設営し、完成させたのでした。

思い返せば、12年の経過は、各々に年を重ね、0才が12才になると同様に、43才は55才に年を重ねる訳で、不思議な実感を持ったのでした。

最初は、続けられればと漠然と捉えていましたが、毎回毎年の積み重ねで、継続の中でしか体感出来ない感慨を持つことが出来ました。

「継続すること」の喜び、大切さを、強く感じます。

もとより地元・地域の人々、幼稚園、保育園、小中学校、そして本大学、一般の大勢の人々の思いの支えで、「バンブーインスタレーションinおおくさ」が、成り立っているのであり、みんなに感謝です。

毎年の恒例行事として、より魅力あるものになる様に今後も精力的に、展開していこうと考えています。

2005　DM

＊写真類は、バンブーインスタレーション実行委員会の提供